

【書評】

やまだようこ編『^{フィールド}現場心理学の発想』

(新曜社、1997年4月発行、191ページ、2400円)

倉 石 一 郎

発達心理、社会心理、性格心理、臨床心理、そして教育心理と、専門領域を異にする5人の心理学者が共同でものした、「^{フィールド}現場心理学」のための方法論の書物、とりあえず本書をこのように性格づけておこう。そして本書はまた、「待たれていた本」でもあった。広く人間研究、人間諸科学にたずさわる誰もが少しずつ、自らのよって立つ理論や方法論に、違和感やズレを感じていたはずだ。感じつつも形にできないまま情念としてくすぶっていたもの、それが遂に高らかに語られるときがやってきたのだ、という思いが去来する。

^{フィールド}現場心理学はまず、その挑戦相手を明確にする。それは、何かを認識するには対象を分類・分析・分断したりせねばならないと考える、つまり切り刻まずにはおかないような、近代の知の方法である。編者やまだは、「それに対して、つなげる、重ねる、育てる、物語るなど、関係性や時間性や文脈性を重視するやり方が^{フィールド}現場の発想のなかには必然的に組み込まれてくるだろう」(『^{フィールド}現場心理学の発想』p.ii、以下ページ数のみ記す)と提起する。このように、従来の知のあり方への違和感をまずは明晰に言語化し、それを乗り越えるような枠組みを探究する共同作業が「^{フィールド}現場心理学」というコトバに託して進められる。むろん一朝一夕で成し遂げられる代物ではないが、その確かな端緒がここに得られたように思う。本書の詳細について若干の紹介を試みる。

まず、本書のタイトルにも掲げられている「^{フィールド}現場」というルビつき表記について。その点について編者のやまだが、第2章「同時代ゲームとしての^{フィールド}現場心理学」で説明している。「ここで使う^{フィールド}『現場』という用語には、日本語の^{げんば}『現場』と英語の『^{フィールド}フィールド』の両方の意味がかけ合わされている。同時代ゲームの発想は、ものを切断し切り分け分類する発想ではなく、異質のものやズレのあるものを同時に重ね合わせる発想である。……「^{フィールド}現場」という用語をルビつきで使う。これはパラレルワールドを多言語同時併記で表現する同時代ゲームの方法を凝縮した方法だといえよう」(20)。やまだは、小説『同時代ゲーム』にヒントを得て、^{フィールド}現場心理学のエッセンスを、2つ(ないし複数)の異質の場所の同時的併存に求める(18)。たとえそれらが両立しがたい矛盾をはらんだ場所でも、安易に居心地のよい方に逃げ帰ってしまわず、どちらも同時に併存させてみるということ。^{バイリンガル}二重言語、^{マルチリンガル}多重言語をわがものとし、それら複数の場所のあいだの往来をし続けること。こうした同時代ゲームの認識は、「近代の知のパラダイム、たとえば『後進国→先進国』というような一次元的な進歩図式を解体する」(15)力を持っている。

構成をみると、本書は5人の著者が各2本ずつ、計10本の論文を寄せている。編者やまだの論考は2本とも、現場心理学を基礎づける方法論が展開されているが、ほか4人はそれぞれまず第1論文で、率直で平易な語り口で自分の研究歴やいま関わっている現場^{フィールド}の状況を語っている。伊藤（社会心理）は院生時代に愛好した旅という経験をフィールドの仕事に重ねて考え、佐藤（性格心理）は大学の心理学教育の現場で出会う学生たちの幻滅や違和感に寄り添い、下山（臨床心理）論文では長く臨床現場^{フィールド}にいた自分が突然大学教育の場に投げ出されたときの戸惑いが率直に語られている。そして奈須（教育心理）は学校現場^{フィールド}を飛び回って研究を進めてきた自分をコウモリに喩えて「正しいコウモリ」のための5原則を提示する。著者の一人が提唱する「"顔"の見える論文を書く」（156）ことが実践されていて、興味深くかつ楽しく読めた。

かわって第2論文では、4人が現在進めているそれぞれの現場心理学^{フィールド}のアウトライン、それぞれのディシプリンの中でのその積極的寄与などをめぐる議論が、アカデミズム内部の相手を想定した語り口で進められる。伊藤第2論文では、「非科学への人々への傾倒」の諸相を明らかにするための、参与観察・面接調査・質問紙調査・実験・アーカイブズ研究を組み合わせたマルチメソッド的アプローチを我々に開示している。佐藤第2論文は、アメリカ生まれのパーソナリティ測定尺度やテストの輸入・追試に明け暮れてきた従来の日本の性格心理学の歩みを厳しく批判した上で、ミシュルの素朴実在論批判以降に展開した状況主義の性格論こそ「性格心理学が探るべき新しい道のひとつだ」（127）と持論を主張する。下山第2論文は、自らが日々コミットする臨床心理学という実践を対象化し、その構造を臨床的仮説生成－検証過程として把握し、これまでの臨床心理学の努力の積み上げが心理「学」全体に貢献しう側面を明らかにしていく。最後に奈須第2論文では、研究者が教育の営みを「つくる」ことに関与するような、教育心理学の分野での4つの実践的アプローチを概観した上で、「現場人と連帯し、現場人と同様つくるために知ろうとする研究者のあり方」（91）であるコンサルテーションの意義と可能性を説いている。私事になるが、私が偶然書店でこの本を見かけ買い込んだとき、最も切実な思いで読んだのは奈須の2つの論考であった。私は奈須と同じく学校現場（教室）を主たるフィールドに研究を行っているが、当時フィールドの人々との信頼関係の構築が十分にはかれず悩んでいた。現場^{フィールド}と研究者との言葉の違い、コミュニケーションパタンのギャップに気づくことから、教師たちの議論の輪に入る手掛かりを掴んでいった（68-69）という奈須の歩みは、当時の私には遠い国のお伽話のようにも感じた。そして今の私になら、自分なりの「学校現場心理学^{フィールド}」の来し方行方を、奈須とはやや異なって残存する葛藤や違和感を大切に語る語り口で、少しばかり語る資格があるかもしれない——本書を再読しながら、そんな思いが去来した。

（日本学術振興会特別研究員 京都大学総合人間学部）